

令和6年度 白川郷学園 英語科研究構想

研究主題

学びのひとりだちを目指す授業の創造

英語科で願う子どもの姿

外国語を用いて自分の思いや考えを表現するために、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理し、相手に配慮をしながら伝え合ったりすることができる姿。

児童・生徒の実態

- 意欲的に英語で自分のことを伝える活動に取り組む子が多い。
- 個人追究では、何を伝えたいか内容を自分で考える姿がある。
- ▲既習事項の定着の弱さに起因し、仲間と考えを交流したり自分の考えを表したりすることに活用できないことから生じる苦手意識がある。
- ▲語句のまとめりとして捉えることや表現したいことを整理して話したり書いたりすることに弱さが見られる。

研究内容

○9年間の学び方の系統性のもと、学びのひとりだちを目指す授業の工夫

(1) 明確なめあてや課題意識をもてる導入

- ・教師と子どもの双方向によるやり取りを通して課題への関心を高める。
- ・背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目し、コミュニケーションを取ることのできる題材の提示。
- ・自分のことや白川村のことなど子どもたちが身近に感じられるようなコミュニケーションの目的や場面・状況等の設定。

(2) 課題解決の具体的な見通しをもち、多様な学び方で試行錯誤できる展開

- ・コミュニケーションを行う目的、場面、状況等に応じた、即興的なやり取りの場の設定。
- ・課題解決に向け、相手に配慮しながらより多様な表現ができる中間交流の場の設定。

(3) 自らの変容や学び方の自覚を促し、次の学びに生かす終末

- ・学びの定着につながる書く活動の設定。(5年生以上)
- ・コミュニケーションの広がりや深まりが実感できる振り返りの場の設定。

※(1)～(3)の手立てとしての白川村の地域素材の活用

※研究の土台としての基礎学力の定着を図る「みがき」の時間の充実